



Serial number 335

第11話

週刊 タバコの正体

いよいよ3学期の終業式を迎えました。この1年間の高校生活はいかがだったでしょうか。昨年4月には、「3学期の終業式なんて、かなり先」だと思っていたはずですが、いざその時を迎えれば「あつと言う間の1年だった」と感じませんか。1年は長いようで短いので、今年の反省をしっかりと次の1年に備えて下さい。

さて、1年の終わりと始まりが切り替わるこの時期は、季節も寒かった冬から暖かい春へと切り替わり、大地の草木も芽吹き始めています。そんな陽気に誘われて気分も何となく晴れやかになる一方で、活動し始めた草木のおかげで花粉症に悩まされる季節でもあります。そして地球規模の大気の流れも影響し中国大陸から黄砂や「PM2.5」と呼ばれる有害粒子が飛来しているようなので、暗い気分になる人も多いかもしれません。

「PM2.5って何？」と思う人もいるでしょう。PM2.5とは、直径2.5マイクロメートル(1000分の1mm)以下の粒子の総称で、主に硫酸塩や炭素粒子、金属粒子などが含まれているようで、空気中に占める濃度が1立方メートルあたり10マイクログラム(1000分の1mg)増えるごとに肺がんによる死亡率が15~17%増加したという研究結果もあるそうです。

「へー、だったら屋外にでたら怖いやん」って思いますよね。そこで、環境省は全国各地の大気汚染物質監視システムで測定したPM2.5の濃度を公表して、注意を呼び掛けています。それによると、1日の平均濃度が1立方メートルあたり70マイクログラムを超える場合は、屋外で長時間激しい運動をしないよう注意する、とされています。

じつは、タバコの煙の粒子も非常に小さく「PM2.5」そのものだと言えます。そして知ってのとおり、その成分も身体に有害なので、中国大陸から飛来する「PM2.5」よりずっと身近に「へー、だったら怖いやん」っていう状況が起こっているのです。

例えば、喫煙可能な飲食店で、数人がタバコを吸えば店内はたちまち「PM2.5」が拡散するわけです。しかも広い屋外に比べ閉め切られた屋内ではその濃度はかなり高くなるのは、簡単に想像できます。実際にそんな飲食店の濃度を測定すると、1立方メートルあたり700マイクログラムを超える場合もあるそうです。つまり環境省が定めた危険レベルの10倍もあるのです。

どうでしょうか。中国大陸から飛来する「PM2.5」以上に、屋内で吸われるタバコの「PM2.5」を警戒する必要があると思いませんか。

産業デザイン科 奥田 恭久